前置詞 of の認知的把握の試み

―前置詞のベクトルという観点から―

松　島　欣　哉

はじめに

筆者は、以前、拙論「前置詞 at の認知意味論的把握の試み― at evening という表現を手がかりに」において、前置詞 at の根底にあるコア・イメージを提示し、それが文学作品の理解に如何に貢献できるかを、例証した[1]。今回の試みは、語義・用法が多岐に亘り、それ故、全体像がなかなか把握できない前置詞 of を総合的に捉えるべく、運動量を表す数学のベクトルの概念を比喩的に利用した試みである。

なお、本論文で使用した省略記号は以下のとおりである。
研究社『大英和』:『新英和大辞典』第６版（ 研究社）
小学館『ランダムハウス』:『ランダムハウス英和大辞典』第２版（小学館）
大修館『ジーニアス大英和』:『ジーニアス英和大辞典』（大修館）
LDOCE6：*Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th edition
MWALED2：*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*, 2nd edition
OALDCE9：*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 9th edition
OED2：*Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM

１．of の分類の方法

イギリス系の英英辞典OED2によれば、前置詞 of の語源の意味は“away, away from”（「離れて、～から離れて」）で、この意味は廃用である。OED2は、ofの語義の発展の歴史は「甚だ複雑」（exceedingly complicated）で、OED2が示すのはこの前置詞の語法と各語法の遡れる限りの用例だ、と述べている。そしてその主な用法として、“removal”（除去）、“separation”（分離）、“privation”（剥奪）、“derivation”（由来）、“origin or source”（起源・源）、“starting-point”（出発点）、“spring of action”（行為の原動力）、“cause”（原因）、“agent”（動作主）、“instrument”（手段）、“material”（材料）の概念を初めとする17の大項目を立て、それを63項目に細分化している。アメリカ系の英英辞典 *Webster's Third New International Dictionary* は、20の大項目を立てそれを32項目に細分しているが、OED2のように大項目の概念は与えておらず、羅列的記述である。

香川大学教育学部　国際理解講座

一方、日本で発行された英和辞典でも、表記の仕方は二様に分かれる。

古いものであれば、齋藤秀三郎が1915年に出版した日英社『熟語本位 英和中辞典』（岩波『熟語本位 英和中辞典』の前身）では、ofの主な語義を「分離」、「根源」、「部分関係」、「形容関係」、「動作関係」、の５つとし、その下で11の下位区分を設けた。1922年に出版した『携帯英和辞典』では、１）分離、２）根源、３）部分関係、４）所有関係、５）形容関係、６）同格関係、７）動作関係、の７つに、慣用と成句を加えて９つとした。斎藤一人が編集した辞書であっても、方針は一定しない[2]。

現代の主要な大型の英和辞典の例を挙げれば、以下の通りである。岩波『大英和』は19項目、研究社『大英和』は17項目、小学館『ランダムハウス』は20項目（ただし、親版の *The Random House Dictionary of the English Language* は16項目）、三省堂『グランドコンサイス英和辞典』は13項目、の羅列形式を採用している。大修館『ジーニアス大英和』のみ、１）所属、２）分離、３）根源、４）部分、５）関連、６）文法的意味、の６つの大項目の下で、16項目に細分化している。

様々な工夫を試みる学習英和辞典は、ofの15～20項目近くの語義・用法をまとまりを持たせながら網羅的に羅列するものもあるが、学習者により分かりやすくするために、大項目で一旦纏めようとするものがかなりある。研究社『新英和中辞典』は、関連する項目を大きく二つに区分し（ただし、この大項目の区分名はない）、その下に細かな項目を配置している。研究社『ルミナス英和辞典』は、大きく三つに区分し（大項目の区分名は「所有」、「分離・起源」および「その他」）、その下に細かな項目を配置している。（ただし、３つ目は関連性の薄い９つの項目の羅列になっている。）三省堂『ウィズダム英和辞典』は、12の大項目を立て、その下で22の細項目を配置しているが、最初に、いくつかの語義の関連性を説明している。旺文社『オーレックス英和辞典』は、14項目の意味・用法を列挙するが、初めに「…から分離しながらも関連を保っている」（1325）という中心義を提示して、以降の語義・用法が、そこから派生していることを意識させようとしている。つい最近出版された、研究社『コンパスローズ英和辞典』は、最初に「つながりを示す」（1278）との文言の下にofのコア・イメージを図示し、以降に示す19項目のうち初めの８項目に関する関連性を樹形図で提示している。因みに、図によって前置詞をイメージ化し、学習者に理解させようとするのが最近の学習英和辞典の傾向である。

２．of の問題点

前置詞ofの理解において、英語を第二言語として学習する日本人にとって、語義の表記の仕方以上に問題となるのは、各語義・用法の下に例示される用例の配置が辞典によって異なることである。その顕著な例を以下に挙げよう。

2.1　岩波『大英和』は、of の語義の10番目に「（動機・原因）…のため、…から」を与え、その用例として、以下の語句・例文を記す。（用例に付した番号は、本文にはない）

10.「（動機・原因）…のため、…から」

１）It must of necessity be so.

２）die of cancer

３）be afraid（ashamed, glad, proud）of …

I feel sick and tired of the whole thing.

研究社『大英和』は、岩波『大英和』の上記の用例に対応する語義を二つに分け、12番目と13番目に「［動機］…から」と「［原因・理由など］…のため、…で」を与え、その用例として、以下の語句・例文を記す。

12.「［動機］…から」
of necessity
of one's own accord
13.「［原因・理由など］…のため、…で」（用例に付した番号は、本文にはない）
1）die of cholera
2）be sick of …
be weary of life
be proud［vain］of …
be afraid［fearful］of dying
You need not be ashamed of your poverty.

上記、岩波『大英和』と研究社『大英和』の語義・用法と用例は、OED2が of の語義の第４番目の大項目 “Of the source or starting-point of action, emotion, etc.; motive, cause, ground, reason.”（行為、感情等の源泉あるいは出発点について。動機、原因、根拠、理由）の下に置いた、以下の語義・用法と用例に対応している。Ⅳ.12.a:“Indicating the mental or non-material source or spring of action, emotion, etc.: Out of, from, as an outcome, expression, or consequence of.”、Ⅳ.13.a:“Indicating the cause, reason, or ground of an action, occurrence, fact, feeling, etc. a. After an intrans. vb.（e.g. die, perish; savour, smack, smell, taste, ring; etc.）”、Ⅳ.14.:“After an adj. or n., indicating that which causes or gives rise to the quality, feeling, or action. a. After an adj.（e.g. dead, sick, weary; ashamed, afraid, fearful; glad, joyful, sorry; proud, vain; etc.）: Because of, on account of.”。岩波『大英和』はOED2の上記の用例を一つに纏め、研究社『大英和』は二つに纏めたに過ぎない。

一方、小学館『ランダムハウス』と大修館『ジーニアス大英和』は、以下のように語義・用法と用例を与えている。

小学館『ランダムハウス』
4.「《原因・理由・動機》…で，…のため」（用例に付した番号は、本文にはない）
1）I went there（out）of necessity.
2）die of hunger

大修館『ジーニアス大英和』
Ⅲ［根源］
8.「［原因・理由・動機］…のため，…で」（用例に付した番号は、本文にはない）
1）of one's own accord［will］
2）die of cancer

一見すれば分かるように、上記両英和辞典は、先行する権威ある英和辞典が挙げるOED２のⅣ.14に対応する用例を挙げていないのである。「原因・理由・動機」に代わって、別の語義・用法の項目の下に、用例を配置している。それぞれ、以下のとおりである。

小学館『ランダムハウス』
9.「《目的格関係》」
（2）《afraid, ashamed, aware, capable, conscious, envious, fond, greedy, jealous, proud などの形容詞のあとで》…を，…について
He is proud of his daughter.

He is desirous of going abroad.

大修館『ジーニアス大英和』
Ⅵ［文法的意味］
14.b.「［形容詞 + of . . . ］」
He is envious of my car and wants one like it.
［語法］この型で用いられる主な形容詞：ashamed, aware, certain, conscious, disrespectful, fond, inconsiderate, mindful, proud, repentant, respectful, sure, suspicious, uncertain, unsure, wary.

小学館『ランダムハウス』の場合は、親辞典の分類を踏襲し英和辞典の編集者たちが補っているものであるが、大修館『ジーニアス大英和』は、英語を第二言語として習得する学習者を念頭に置いて編集された、各種の英英辞典の語義・用法の分類に従って表記している。日本人にとって馴染み深い学習英英辞典の例を以下に挙げる。
OALDCE 9
11. used after some adjectives before mentioning sb/sth that a feeling relates to
to be proud of sth

LDOCE 6
12. used after some adjectives that describe feelings, to show who or what the feeling is directed towards
He's always been frightened of spiders.
Most children want their parents to feel proud of them.

OED2や岩波『大英和』や研究社『大英和』は、"be afraid/ ashamed/ envious/ frightened/ proud/ sick/ tired of 〜" という表現の各種感情の原因を of 以下に求める、より根源的な語義・用法を提示し、学習英英辞典や小学館『ランダムハウス』や大修館『ジーニアス大英和』は、各種感情の赴く先を of 以下に求める、より派生的な語義・用法を提示しているのである。
例えば以下の文はどうであろうか。
His daughter looked such a mess that he was ashamed of her.（OALDCE9）
これは、「彼の娘の服装/髪型がひどい格好をしていたので、彼は娘のせいで恥かしい思いをした」、と原因を示しているとも、「娘を恥ずかしく思った」と感情の赴く先を示しているとも理解できよう。以下の文はどうであろうか。
You should be ashamed of yourself.（LDOCE6）
この場合、自分自身のしたことから恥ずかしい感情を引き起こせとof以下を原因と見ることも、恥ずかしいという感情を of 以下の自分自身に向けよと言っているとも解せる。LDOCE6の与える「感情が誰あるいは何に向けられているかを示す」という語義の説明は、後者の解釈を優先しているのでる。

2.2　ある用例をどの語義・用法に分類するかという問題は、前置詞 of の場合、他の語以上に英語学習者を混乱させる。これは偏に、OED2が示したように、前置詞 of の語義の発展の歴史が「甚だ複雑」であることに由来している。英語学習者に与える混乱の例をもう一つ挙げてみよう。
OALDCE 9
1. belonging to sb; relating to sb（誰に属している、誰に関係している）

the love of a mother for her child

「子供に対する母親の愛情」という意味であるが、この例示の場合は「子供に対する母親に属する愛情」という捉え方が可能であろう。しかし、これを“the love of a mother”で断ち切り、第９番目の語義・用法およびその用例と併置すると、どうであろうか。

９. used after nouns formed from verbs. The noun after ‘of’ can be either the object or the subject of the action.（動詞から形成された名詞の後で用いられて。of の後の名詞は行為の目的語か主語のどちらかでありうる）

the arrival of the police（＝ they arrive）
criticism of the police（＝ they are criticized）
fear of the dark

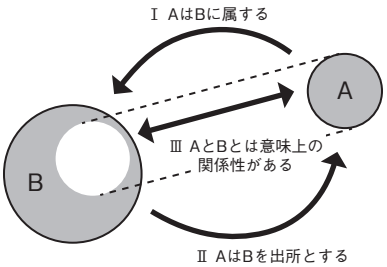
“the love of a mother”は、“the arrival of the police”と同様に、主語と動詞の関係（「母親が愛する」）が成り立つことが分かる。それ故に、多くの学習英和辞典が、“the love of God”を例に挙げ、「（人間の）神への愛」（目的関係）と共に、「神の（人間に対する）愛」（主格関係）との二様の解釈の可能性を示すのである。

OALDCE9の“the love of a mother for her child”の用例は、研究社『新英和中辞典』では、語義A.１.「[所有格の関係･所属を表して]…の，の所有する，…に属する」の用例としてではなく、語義A.２.「[主格関係を表して] a [動作の行為者，作品の作者を表して] …が，…の」の用例として挙げられている。（ただし、“child”が“children”と複数になっている。）

３．ofの認知的把握

3.1. *The Concise Oxford Dictionary*（9th）は、of の語義・用法と用例を与える前に、“connecting a noun（often a verbal noun）or pronoun with a preceding noun, adjective, adverb, or verb, expressing a wide range of relations broadly describable as follows”（名詞（しばしば動詞的名詞）あるいは代名詞と、先行する名詞、形容詞、副詞あるいは動詞とを結び付け、以下のように大まかに記述されうる広範囲な諸関係を表現する）（944）と記す。要するに、前置詞 of はその前後にある言葉の間の関係性を示しているという点が、of の様々な語義・用法に通底する概念であるということだ。

このことを端的に図により説明しようとしたのが、ベネッセ『Eゲイト英和辞典』である。この英和辞典は、最初に前置詞ofのコア･イメージを図示し、３つの大項目（「帰属」、「…から出て[出所]」および「同格・関連」）を立て、その下で10の細項目を配置している。２年後に出たベネッセ『エクスプレスEゲイト英和辞典』では、大項目は「帰属」、「出所」および「意味関係」と修正され、細項目が15項目に拡大されている。



（ベネッセ『エクスプレスEゲイト英和辞典』、p. 925より）

そこで筆者は、以下に、ベネッセ『エクスプレスEゲイト英和辞典』の絵を参考にし、一旦、ofの語義・用法をI.「帰属：所属、所有、部分」、II.「出所：分離、根源、原因・理由、材料」、III.「意味関係：同格、主格関係、目的格関係、関連」、IV. その他、に分類し[3]、ベネッセ『エクスプレスEゲイト英和辞典』の絵に示された矢印の方向性が持つ動きを「of のベクトル」と名付け[4]、それぞれ、「←」、「→」、「⇆」の記号を示しながら、できる限り学習英英辞典から完全な文の用例を引用してみる。ただし、引用例は of の項目の用例ではない場合がある。

Ⅰ.「帰属」

1）所属（←）

the role of the teacher（OALDCE9）

She was crowned queen of England.（MWALED2）

2）所有（←）

The leg of the table is loose.（MWALED2）

We admired the courage of the young woman.（MWALED2）

3）部分

a）動詞と共に（→）

Would you care to partake of some refreshment?（OALDCE9）

as though of hemlock I had drunk.（Keats “Ode to a Nightingale,” l. 2）

b）数詞と共に（←）

‘Sunflowers’ is one of his best-known paintings.（LDOCE6）

c）分量・度量・種類の名詞と共に（→）

a kilo of apples, a glass of water

The flowers attract several different kinds of insects.（LDOCE6）

I like a good strong cup of tea first thing in the morning.（OALDCE9）

Ⅱ.「出所」

1）分離

a）動詞と共に（→）

90% of patients can be cured of the disease.（LDOCE6）

The new secretary will relieve us of some of the paperwork.（OALDCE9）

A lot of these children have been deprived of a normal home life.（LDOCE6）

A last-minute goal robbed the team of victory.（OALDCE9）

I cleared my desk of papers.（OALDCE9）

b）名詞・形容詞・副詞（相当語句）と共に（←）

It’s a quarter of seven（＝6.45）.　（LDOCE6）

The police force should be independent of direct government control.（OALDCE9）

Our libraries are short of funds.（LDOCE6）

They live ten miles north of Boston.（OALDCE9）

Most roads are now clear of snow.（OALDCE9）（→）

最後の用例は動詞clearの意味と重なって、ベクトルは「→」向きに感じられる。

２）根源

a）動詞と共に（←）

He is of Polish descent.（MWALED2）

He was born of German parents.（OALDCE9）

Can I ask a favour of you?（MEDAL2）

b）形容詞と共に（←）

It’s really kind of them to let us use their pool.（LDOCE6）

It's foolish of me, I know, but I never thought he'd lie to me.（OALDCE9）

従来、これらの用例のofは、「Ⅲ.［意味関係］２）主格関係」の項目に分類されて来た。しかし、kindあるいはfoolishという性質がthemあるいはmeから出ている、と解することが可能ではなかろうか。この解釈は、ベネッセ『Eゲイト英和辞典』に依っている。

３）原因・理由

a）動詞と共に（←）

The animals died of starvation in the snow.（LDOCE6）

Smith accused her of lying.（LDOCE6）

He came back of his own accord.（OALDCE9）

Many of the jobs are, of necessity, temporary.（LDOCE6）

b）形容詞と共に（← あるいは ⇆ あるいは →）

Thanks Marge, I’ll be glad of the help.（LDOCE6）（←）

He’s always been frightened of spiders.（LDOCE6）（⇆）

I'm sick and tired of all the arguments.（OALDCE9）（⇆）

You should be ashamed of yourself.（LDOCE6）（⇆）

be ashamed/afraid/frightened/scared/terrified/tired ofなどの、動詞の過去分詞に由来する形容詞は、「←」向きのベクトルが強く感じられる場合があるかもしれないが、大部分が「⇆」あるいは「→」向きのベクトルであろう。上記２番～４番の用例は、of以下のことが原因で「怖い／うんざりだ／恥ずかしい」という感情が引き起こされたとも、あるいは「怖い／疎ましい／恥ずかしい」という感情がof以下の事柄に向かっているとも、捉えられる。言い換えれば、これらの用例の of は、原因の of から、関連のofへと転移しているのである。英英辞典・英和辞典とも、解釈は二様に別れる。Cf. Ⅲ．5）b.

４）材料・素材の名詞と共に（←）

The topping is made entirely of cheese.（MWALED2）

The committee is composed mainly of lawyers.（OALDCE9）

It's cruel to make fun of people who stammer.（OALDCE9）（→）

最後の用例はもはや「材料」という意識はないであろう。of のベクトルは「→」向きである。

Ⅲ.「意味関係」

１）同格（⇆）

The four of us enjoyed ourselves at the party.（MWALED2）

the city of Dublin, the problem of unemployment（LDOCE6）

an angel of a girl（→）

Where’s that idiot of a boy?（OALDCE9）（→）

最後の２例の of のベクトルは「→」向きである。

２）主格関係（←）

the arrival of the police（OALDCE9）

the plays of Shakespeare（LDOCE6）

主格属格（subjective genitive（“God’s love of men”））と同じ働きである。

３）目的格関係（←）

criticism of the police（OALDCE9）

We lived in constant fear of losing our jobs.（OALDCE9）

最初の用例は目的格属格（objective genitive（“the boy’s release”））と同じ働きである。

４）性質・状態を示す形容関係[5]（←）

a man of courage, of importance

She recently lost her husband of 30 years.（MWALED2）

５）関連

a）動詞と共に（→）

speak of, think of

You remind me of your father when you say that.（OALDCE9）

b）形容詞と共に（→）

She’s very conscious of the problems involved.（OALDCE9）

Such behavior is not characteristic of a good neighbor.（MWALED2）

He was proud of himself for not giving up.（OALDCE9）

最後の用例は、従来は、「Ⅱ.「出所」３）原因・理由．b」の項目に分類されるが、この例では原因は for 以下で示され、of 以下は感情の赴く先であることが明白である。Cf. II. ３）b.

c）名詞と共に（←）

news of his arrest.（LDOCE6）

She told a story of her travels in Italy.（MWALED2）

Ⅳ．その他

時を示す副詞句を作る（←）

We often used to walk by the river of an evening.（LDOCE6）

3.2 以下に、前置詞 of のベクトルという観点から、上記の例文を整理し直してみよう。

１．「←」向きのベクトル

Ⅰ．「帰属」

１）所属（←）

the role of the teacher（OALDCE9）

She was crowned queen of England.（MWALED2）

２）所有（←）

The leg of the table is loose.（MWALED2）

We admired the courage of the young woman.（MWALED2）

３）部分

b）数詞と共に（←）

‘Sunflowers’ is one of his best-known paintings.（LDOCE6）

Ⅱ.「出所」

1）分離

b）名詞・形容詞・副詞（相当語句）と共に（←）

It's a quarter of seven（＝6.45）.　（LDOCE6）

The police force should be independent of direct government control.（OALDCE9）

Our libraries are short of funds.（LDOCE6）

They live ten miles north of Boston.（OALDCE9）

2）根源

a）動詞と共に（←）

He is of Polish descent.（MWALED2）

He was born of German parents.（OALDCE9）

Can I ask a favour of you?（MEDAL2）

b）形容詞と共に（←）

It's really kind of them to let us use their pool.（LDOCE6）

It's foolish of me, I know, but I never thought he'd lie to me.（OALDCE9）

3）原因・理由

a）動詞と共に（←）

The animals died of starvation in the snow.（LDOCE6）

Smith accused her of lying.（LDOCE6）

He came back of his own accord.（OALDCE9）

Many of the jobs are, of necessity, temporary.（LDOCE6）

b）形容詞と共に（←）

Thanks Marge, I'll be glad of the help.（LDOCE6）

4）材料・素材の名詞と共に（←）

The topping is made entirely of cheese.（MWALED2）

The committee is composed mainly of lawyers.（OALDCE9）

Ⅲ.「意味関係」

2）主格関係（←）

the arrival of the police（OALDCE9）

the plays of Shakespeare（LDOCE6）

3）目的格関係（←）

criticism of the police（OALDCE9）

We lived in constant fear of losing our jobs.（OALDCE9）

4）性質・状態を示す形容関係（←）

a man of courage, of importance

She recently lost her husband of 30 years.（MWALED2）

5）関連

c）名詞と共に（←）

news of his arrest.（LDOCE6）

She told a story of her travels in Italy.（MWALED2）

Ⅳ. その他

時を示す副詞句を作る（←）

We often used to walk by the river of an evening.（LDOCE6）

2．「→」向きのベクトル

Ⅰ．「帰属」

3）部分

a）動詞と共に（→）

Would you care to partake of some refreshment?（OALDCE9）

as though of hemlock I had drunk.（Keats “Ode to a Nightingale,” l. 2）

c）分量・度量・種類の名詞と共に（→）

a kilo of apples, a glass of water

The flowers attract several different kinds of insects.（LDOCE6）

I like a good strong cup of tea first thing in the morning.（OALDCE9）

Ⅱ．「出所」

1）分離

a）動詞と共に（→）

90% of patients can be cured of the disease.（LDOCE6）

The new secretary will relieve us of some of the paperwork.（OALDCE9）

A lot of these children have been deprived of a normal home life.（LDOCE6）

A last-minute goal robbed the team of victory.（OALDCE9）

I cleared my desk of papers.（OALDCE9）

b）形容詞・副詞（相当語句）と共に（→）

Most roads are now clear of snow.（OALDCE9）

4）材料・素材の名詞と共に（→）

It’s cruel to make fun of people who stammer.（OALDCE9）

Ⅲ．「意味関係」

1）同格（→）

an angel of a girl

Where’s that idiot of a boy?（OALDCE9）

5）関連

a）動詞と共に（→）

speak of, think of

You remind me of your father when you say that.（OALDCE9）

b）形容詞と共に（→）

She’s very conscious of the problems involved.（OALDCE9）

Such behavior is not characteristic of a good neighbor.（MWALED2）

He was proud of himself for not giving up.（OALDCE9）

3．「⇆」向きのベクトル

Ⅱ．「出所」

3）原因・理由

b）形容詞と共に（⇆）

He’s always been frightened of spiders.（LDOCE6）

I’m sick and tired of all the arguments.（OALDCE9）
You should be ashamed of yourself.（LDOCE6）

Ⅲ.「意味関係」

1）同格（≒）

The four of us enjoyed ourselves at the party.（MWALED2）
the city of Dublin, the problem of unemployment（LDOCE6）

英語を第二言語として学習する日本人にとって、前置詞 of の20近くの用法を暗記するのは不可能に近い。しかし、上記のように整理すると、of の前後にある言葉の間の関係性を一目で把握できるようになる。これまでの英語学習で得たバラバラな語義・用法をベクトルという観点から整理すれば、前置詞の中で語義・用法が最も多岐に亘る of をより直感的に認識できるようになるのではなかろうか。

おわりに

我々は第二言語である英語を学習するときに、一回一回、与えられた文脈の中で単語の意味を抑える。それはバラバラな知識として集積されている。しかし、そのバラバラな知識をある段階で総合しないと、単語の輪郭は掴めない。その総合化は、学習者個人に任されているのが今の英語教育の現状であろう。今回の試みは、その総合化の一手段として、前置詞のベクトルという概念を導入してみた。

註

1．松島欣哉「前置詞 at の認知意味論的把握の試み― at evening という表現を手がかりに」（田村道美先生退職記念事業会 編『英語と英文学と―田村道美先生退職記念論文集』ホワイト印刷、2014）に所収。pp.33-42.

2．なお、斎藤は、1932年に出版した、中村捷が「日本の英文法書で、前置詞をこれだけ体系的に記述しているものは本書をおいてほかにない」（『実用英文典』652）と評価する、*Practical English Grammar* では、その第３巻で of の用法を 1）所有格、2）形容詞、3）同格、4）部分、5）分離、6）出所・起源、7）関連、の７つに区分し、前置詞の用法の観点から数種の前置詞を纏めて解説する第４巻では、10項目の下に of を配置している。本書は文法書であるので、このような書き方になったと考えられる。

3．ただし、小項目の名称とその用例の配置に関しては、他の英英辞典・英和辞典を参考に、ベネッセ『エクスプレスEゲイト英和辞典』に従っていない場合がある。

4．この名称は、ベネッセ『エクスプレスEゲイト英和辞典』の編者たちのものではなく、筆者が数学の専門用語を比喩的に用いた独自のものである。

5．「性質・状態」を示す of をどの項目に配置するかは辞書の編集者によって異なるが、筆者はこの項目に配置した。これは、齋藤秀三郎の二つの辞書からヒントを得たものである。

引用参考文献

赤須薫 編『コンパスローズ英和辞典』、研究社、2018.
井上永幸・赤野一郎 編『ウィズダム英和辞典』第４版、三省堂、2019.
小西友七・南出康世 編『ジーニアス英和大辞典』大修館、2001.
齋藤秀三郎『実用英文典』（中村捷 訳述）開拓社、2015.
齋藤秀三郎 編『斎藤英和辞典』名著普及会、1982.（『携帯英和辞典』（日英社、1922）の復刊）
齋藤秀三郎 編、豊田實 増補『熟語本位 英和中辞典』岩波書店、1950.

三省堂編修所 編『グランドコンサイス英和辞典』、三省堂、2001.
小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会 編『ランダムハウス英和大辞典』第２版 小学館、1994.
竹林滋・東信行・寺澤芳雄 他編『新英和大辞典』第６版 研究社、2002.
竹林滋・東信行・諏訪部仁・市川泰男 編『新英和中辞典』第７版、研究社、2003.
竹林滋・小島義郎・東信行・赤須薫 編『ルミナス英和辞典』第２版、研究社、2005.
田中茂範『表現英文法』増補改訂第２版、コスモピア、2017.
田中茂範・武田修一・川出才紀 編『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション、2003.
田中茂範・武田修一・川出才紀 編『エクスプレスEゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション、2007.
花本金吾・野村恵造・林龍次郎 編『オーレックス英和辞典』、旺文社、2008.
南出康世 編『ジーニアス英和辞典』第５版、大修館、2014.
Flexner, S. B., ed. *The Random House Dictionary of the English Language*, 2nd edition. Random House, 1987.
Harris, W. T., ed. *Webster's New International Dictionary of the English Language*. G. & C. Merriam, 1922.
Hey, L. and Holloway, S., eds. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 9th ed. OUP, 2015.
［Perrault, S. J., ed.］ *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*, 2nd ed. Merriam-Webster, 2016.
Saito, S. *Practical English Grammar*, Rev.ed. Kairyu-do, 1948.
［Simpson, J. and Weiner, E., eds.］ *Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM. OUP, 2009.
Thompson, D., ed. *The Concise Oxford Dictionary of Current English*, 9th edition. OUP, 1995.
Longman Dictionary of Contemporary English, 6th edition. Pearson Education, 2014.